

機関番号：10101

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20730431

研究課題名 (和文) 健全乳幼児及び発達障害児における役割交替模倣と自他意識の発達

研究課題名 (英文) Development of role-reversal imitation and self-other recognition in typical and atypical children.

研究代表者

川田 学 (KAWATA MANABU)

北海道大学・大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター・准教授

研究者番号：80403765

研究成果の概要 (和文)：

生後 1 歳～2 歳代における役割交替模倣と自他認識の発達について、定型発達幼児と自閉症幼児を対象に検討した。研究は定型発達幼児を対象とした課題場面での横断的研究、自閉症幼児を対象とした課題場面および保育場面での参与観察研究で構成された。役割交替模倣を測定する課題としてサカナとタモ課題、自己鏡映像認知を測定する課題としてマーク課題、積極的教示行為を検討する課題として他者の課題解決困難場面提示課題を用意し、課題間の連関を検討した。その結果、定型発達幼児では、サカナとタモ課題の通過率は 1 歳半から 2 歳にかけて有意に増加した。また、サカナとタモ課題の通過は他の 2 課題を有意に相関していた。自閉症幼児においても定型発達幼児と類似した傾向が見られたが、他の 2 課題に対して自己鏡映像認知の成績がやや特異であった。総合して、役割交替模倣が自他認識の発達を調べる上での有益なマーカーとなりうることが示唆された。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this study was to examine the development of role-reversal imitation and self-other recognition in typically developing children (1-2yrs) and children with autism. Many typically developing children passed the task of role-reversal imitation by 2 years old, and their scores significantly correlate with another two tasks (for mirror-self-recognition and active teaching). Children with autism showed specific pattern of the correlates between tasks, that is the mirror-self-recognition had more ease than another two competences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：役割交替模倣, 幼児, 自閉症, 自己意識, 他者理解, 社会認知的発達, 情動, 参与観察

1. 研究開始当初の背景

近年、比較認知科学的アプローチにより、ヒトを含む霊長類の模倣能力とその発達に関する研究知見が蓄積されるとともに、ヒト乳幼児における模倣能力の高さが改めて浮き彫りになってきた。

本研究では新しい模倣の分類枠組みとして、他者と同一の動作を行う模倣を同型的模倣、相互に応答的關係にある役割行動において過去に他者が取った役割を模倣し、他者に対してして返す形式の模倣を役割交替模倣と区別し、役割交替模倣の発達に着目した。

役割交替模倣は自己と他者の相対的關係の認識を基盤とするとの仮説から、客体的自己意識の指標である自己鏡映像認知および他者の課題解決場面に対する教示的介入である積極的教示行為との発達連関を想定した。

更に、自他關係の認識に障害を有すると考えられる自閉症児においては、役割交替模倣の発達に困難があるのではないかと、また自他認識に関連する他の課題との間に特異な関連性が見られるのではないかとの問題意識の下、次のような研究目的を設定した。

2. 研究の目的

生後1年目後半から生後2年目において出現・発展する役割交替模倣と自己意識の発達の連関性について、定型発達幼児と自閉症幼児との比較検討を通して明らかにすることを目的とした。具体的には以下の2点を検討課題とした。

- (1) 定型発達幼児における役割交替模倣の発達水準を明らかにし、主として自己鏡映像認知、積極的教示行為との発達連関を検討すること。
- (2) 自閉症幼児における役割交替模倣の水準を検討し、その成立と広く自己意識の発達との関連性を明らかにすること。

3. 研究の方法

本研究は大きく分けて3つの研究からなる。

- (1) 定型発達幼児における役割交替模倣と自己鏡映像認知および積極的教示行為との発達連関：保育所に通う幼児（1歳～2歳代）

約50名を対象とし、役割交替模倣に関する課題（サカナとタモ課題）、自己鏡映像認知に関する課題（マーク課題）、積極的教示行為に関する課題（他者の課題解決困難場面提示課題）を実施した。

(2) 自閉症幼児における役割交替模倣と自己鏡映像認知および積極的教示行為との発達連関：特別支援学校幼稚部に在籍する自閉症幼児9名を対象に、(1)の定型発達幼児と同様の研究パラダイムで実験課題を実施した。

(3) 自閉症幼児における役割交替模倣等の縦断的な課題実施と保育場面における参与観察研究：(2)の9名中2名について、約4か月の間隔をあけて2回の課題実施を行い縦断的な変化を検討するとともに、保育場面における対教師、対他児とのコミュニケーションに関する参与観察データを総合的に分析し、役割交替模倣と自他認識との発達連関について検討した。

4. 研究成果

本研究では、1-2歳代における自他認識の発達に関して、特に役割交替模倣に着目し、定型発達幼児と自閉症幼児との比較を盛り込みながら、自他認識の発達を規定する諸要素を検討することができた。

1つの媒介物を介した役割交替である第一次役割交替模倣が生後1年目の終わり頃に発達するのに対し、本研究では2つの異なる機能を持つ媒介物を介したより複雑な社会的認知構造の発達を必要とすると考えられる第二次役割交替模倣が生後2年目の後半に発達するとの仮説を立て、その発達が幼児の自他關係の認識に関する質的転換を意味していることについて、積極的教示行為と自己鏡映像認知との連関を軸に検討した。本研究では、2者間のコミュニケーション場面の中に、2つの媒介物があり、かつそれぞれが異なる役割（機能）をもち、人物Aは媒介物Xを用いて役割X'を演じ、人物Bはそれに対応する媒介物Yを用いて役割Y'を演じ、更に役割を替えて人物Aが媒介物Yを用いて役割Y'を演じようとしたときに、人物Bがそれを理解して対応する媒介物Xを用いて役割X'を演じることができるとき、人物Bは第二次役割交替模倣を遂行したと判断した。

第二次役割交替模倣を測定する課題として、独自に「サカナとタモ」課題を開発した。「サカナとタモ」課題では、ビニール製のタモ網と紙製のサカナを材料として用意した。実験者は、タモにサカナが入った状態で提示

し、対象児の注意をひきつけながらサカナを床にばら撒いた。このとき、「おサカナさんだよー」などと発話した。そして、対象児に向かってタモを構え、対象児を見た。はじめは声かけなしで構え、5秒ほどしても対象児がサカナを持たない場合には「おサカナさん入れて」などと発話した。対象児がサカナを持たない場合、実験者がサカナをタモに入れるところを見せ、再びタモを構えて対象児の反応を見た。それでもサカナを持たなかったり、タモに入れなかったりした場合は課題を終了した。

「サカナとタモ」課題を実施した結果、1歳中盤から2歳にかけて、正確に役割交替を遂行する幼児が有意に増加した (Fig.1)。

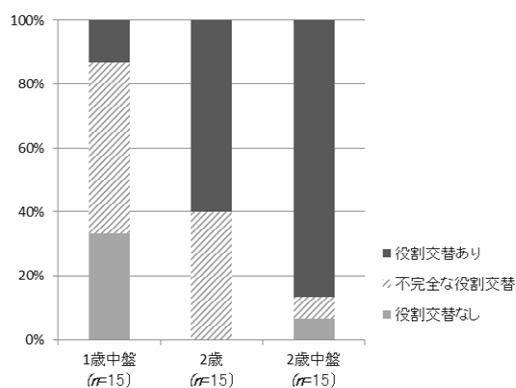


Fig.1 「サカナとタモ」課題の年齢群別反応内訳

また、「サカナとタモ」課題の達成レベルは、他者の課題解決困難場面提示課題 (赤木, 2004; 積極的教示行為の能力を測定) とマーク課題 (Gallup, 1970; 自己鏡映像認知の能力を測定) とも高い相関を示した (Fig.2, 3)。

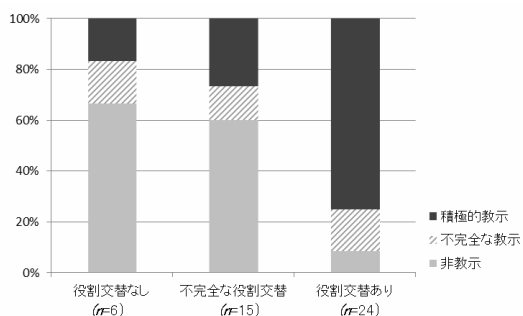


Fig.2 「サカナとタモ」課題と他者の課題解決困難場面提示課題との関連

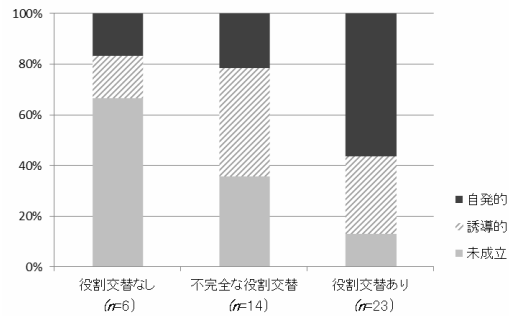


Fig.3 「サカナとタモ」課題とマーク課題の関連

同様の傾向は自閉症幼児においても認められたが、自己鏡映像認知 (マーク課題で測定) だけはやや異なる傾向を示し、他の2つの課題が未成立あるいは不十分であったとしても、マーク課題にのみ通過した幼児は7名中4名いた。一方で、縦断的な事例検討を行った自閉症幼児 (男児) では、日常場面での他児や教師とのコミュニケーションの発達と、3つの課題場面における変化が連動していた。マーク課題は単体で自己意識の発達を包括的に測定できる課題ではなく、本研究のように他の課題や日常場面での縦断的観察研究などを併せて行う必要があろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ・川田学 (2010) 食の中の模倣過程と自他関係の形成. ベビーサイエンス, 9, 24-36.
- ・川田学 (2010) ことばの生まれる前夜に: 共有関係のなりたちとその発達の意味. 発達, 121, 18-25.
- ・川田学 (2009) 乳児期における自他関係発達の諸問題: Tomasello と Meltzoff の理論に関する批判的検討を通して. 心理科学, 30(1), 72-85.

[学会発表] (計4件)

- ・川田学 (2011) 1~2歳児における役割交替模倣と自他認識の発達: 「サカナとタモ」課題を用いた実験的検討. 日本発達心理学会第22回大会論文集, 587. 2011.3.27 東京学芸大学
- ・川田学 (2009) 相互同一化過程としての食: 乳児期の自他関係発達との関連で, 日本赤ちゃん学会第9回学術集会, 大会企画シン

ポジウム, 話題提供者, 2009.5.17.滋賀県立大学

- ・川田学 (2009) 他者のような自己のなり方: 疑似酸味反応と役割交替模倣からみる乳幼児の対人世界, 心理科学研究会 2009 年春の全国集会, 乳幼児分科会, 話題提供者, 2009.4.17.千葉県白子温泉
- ・Kawata, M. (2008) Imitation or empathy?: On false acid response in infancy. Oral presented at “*Frontiers of comparative cognitive developmental neuroscience*”, Kyoto (Kyoto University Grobal COE Program’s International workshop) . 2008.9.17.Kyoto University.

〔図書〕 (計 1 件)

- ・川田学 (2008) やさしい発達心理学 (都筑学編) ナカニシヤ出版 (第 1 章 人間関係の起源 pp.1-14 担当)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川田 学 (KAWATA MANABU)
北海道大学・大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター・准教授
研究者番号: 80403765

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし